

\*この記事・写真は読売新聞社の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。

読売新聞 2016年 2月 22日 付 (静岡版)

# ふるさとと メール

# ビジネスの現場足運ぶ

静岡を離れ、東京大学に進学した伊藤元重さん(64)は、同級生と切磋琢磨して、経済学の勉強にめり込んでいきます。米国の大学院に留学後、帰国して教べんをこる傍ら、官公庁の研究会やビジネスの現場に足を運ぶようになります。「ふるさとにメール」の2回目は、安倍政権のブレーンとして活躍する伊藤さんの原点を探ります。(聞き手 秋山洋成)



「素晴らしい先生や仲間にも恵まれ、経済学に夢中になった」と語る伊藤さん(東京都文京区で)＝伊藤敏二撮影

東大教授

伊藤元重さん 田



東大では経済学部に進みました。

「当時、東大にはマルクス経済学の先生が多かったのですが、自分はマルクス経済学の考えにどうもなじみませんでした。2年生の時に、近代経済学の研究者である、根岸隆先生のマクロ経済学の講義を聞いて、感動しました。経済学を真剣に勉強しようと思った。根岸先生のゼミの門をたたきました」

今のお仕事につながる原点ですね。以来、経済学に魅了され没頭されたのですか。

「かなり背伸びをして、神保町の本屋で、最先端の経済学の本を買っていました。当時で8000円ほどもある本を、20回くらい足を運び、最後は清水の舞台から飛び降りる気持ちで購入した時もありました。ケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』を読ん

## 優秀な仲間と議論できた幸運

アルバムから



1982年頃、教べんをとり始め、学生たちと議論を戦わせた

では真っ赤に線を引き、井堀利宏さん(現政策研究大学院大学教授)と議論したの、良い思い出です」

就職せずに東大大学院に進学しました。

「学部時代の親しい友人には、浅子和美さん(現立正大学教授)や井堀さん、吉川洋さん(現東大教授)らがいきました。彼らとどのくらい一緒に大学院に進学しようか決めました。友人の存在が職業選択に大きな影響を及ぼしたのは間違いないと思います。優秀な仲間にも恵まれ、議論を戦わすことが

大学院に進学後、米国に留学しました。

「東大大学院の修士課程2年の時に、米国の私立ロチェスター大学の大学院に留学しました。当時は日米間の所得格差が大きくて、奨学金をもらえないと生活できませんでした。1が300円程度です。キッチンが共同で、ほかの国の留学生たちと計3人で一緒に暮らしました。午前8時に大学院に行き、食事の1、2時間を除いて、午後11時頃まで勉強しました。一生のうちで、一番集中して勉強した時代かもしれません。担当の先生に発破をかけられ、通常は4、5年かかるのを3年間で経済学の博士号を取りました。そんな中で、留学生仲間だった妻と知り合いました。結婚しました」

「27歳の時、東京都立大(現首都大学東京)の助教授となりました。その後、東大に移り、官公庁の研究会に声がかかるようになり、35歳頃までは研究室にこもる生活でしたが、色々な経営者とも知り合い、ビジネスの現場に興味を持ちました」

帰国後、教べんをとりします。その傍ら、工場などの現場をよく訪れ、「ウォーキングエコノミスト」と紹介されますね。

35歳頃に、転機を迎えられたのですか。

「研究者としての地位が固まりだした頃で、新しい世界に飛び込むことは勇気がいりました。その時頭に浮かんだのは、日本を代表する理論経済学者である森嶋通夫先生の『人生三段ロケット論』。人生には新しいロケットに点火し、何回か古いロケットを切り離す必要があります、自分の切り離しの時期はいつかを意識することが大切です。ビジネスの現場訪問や政策議論への参加など新しい活動に取り組んだことで、今の自分があるのだと思います」

書くテーマ常に考え

伊藤さんは新聞連載を毎週抱え、年間で250本近くも原稿を書いた年もあるという。専門の国際経済にとまらず、情報技術(IT)や電力改革、流通など扱うテーマは多岐にわたる。

秘訣を尋ねると、一度あるテーマについて原稿を書くこと、新しい問題点が見つかり、次の考察につながる国際会議などに出席できるのだという。「毎週締め切りがあるので良いプレッ

チャーと話すことになり、書く作業を通じて、自分の言葉に整理し、頭にしっかりと入っているのだという。